他園の園長、先生たちから見た竹田幼稚園(竹田西部幼稚園)は?

さる平成27年10月22日に東北地区の私立幼稚園園長から1年目までの約150名の教員の方から公開保育を通してご意見頂戴しました。2年間竹田幼稚園・竹田西部幼稚園の両園が自己点検、学校評価(HP掲載)を繰り返し、第三者評価に対する試みとして「公開保育を活用した第三者評価」を行いました。同時にグループワークのスル(アクティブラーニング)、様々な分析手法、保育の質の向上を全員で取り組んだ結果です。

「平成27年度全国私立幼稚園東北教員研修大会
第8分科会　幼稚園における学校評価
—評価により園としての組織的・継続的な改善を考える」

1.全体

・園の方針、教育課程、幼児の取り組みが一貫していると感じた。
・もっと竹田幼稚園を知りたくなりました」「見てみたい！」という声も聞かれました。
・先生たちがはつらつとして元気で明るい感じがよかった。
・先生たちが自然に子どもの側にいて何気なく職員同士情報を交換しているのがよかった。
・先生たちの言葉がけも丁寧で、子どもたちにあったことばをかけていた。
・先生たちの役割として、一緒に踊ったり、お客さんになったり、子どもの意欲が続くように配慮されていた。
・自園で自信を持って取り組んでいるものがある。
・職員配置がすごい。(園長先生が普通ではできない配慮をしている)職員の数が多いがコミュニケーションを上手くとりながら子どもたちを皆で見ている。まるで海外の幼稚園のように少人数制だ。
・「学校評価」に向き合っていく先生たちが素晴らしい!!ハートが強くなったでしょうね。
・「学校評価」について今は全国の私立幼稚園のやり方で話を進めているが、
園の取り組みとして様々な独自の取り組みをして分析している。
時間がかからない方法というのは驚きだ。
・学びの姿勢が素晴らしい。きっとたいへんだったろうなとお察しします。
・先生たちの笑顔がすてきですね。その場だけの取りつくろった笑顔ではない。写真まで笑顔でお出迎えでした。

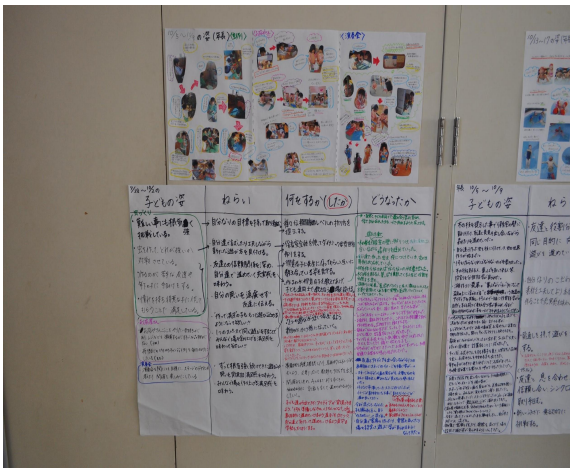
・絵画の素晴らしさが目にとまった。どんなプロセスがあり体験しているのか、画材はどんなものから始めているのか?
A, 専門の教師がいる。本物に出会うことは体験している。博物館、美術館見学など
・水泳の活動に釘付けになり見入っていた。3歳からどんな生活をしていくとあんな活動ができるのだろうか。?
A, 専門の教師がいる。レッスンの流れ(独自カリキュラム)がある。
・外に遊びを出してみるところは、計画の中で考えたのか、どうやって連携をとったか?
A,どの遊びをどういう場所に外に出すかなど、相談してやった。子どもたちの様子を見ながら、計画・実践・振り返りチェック・改善（PDCAを3回継続して今に至っているとのことでした。）教育システムを継続している。毎週金曜日を職員会議と位置付け実践しているとのことでした。
・各コーナー、立体装飾で作られていて、どこにも平面が無い。子どもたちが参加して作っていたり和みました。
・子どもたちがプールを好きになる内容がたくさん見られました。
・子どもたちがそれぞれの目標を立てたり、文字にする取り組みが素晴らしい。それを発表している場を設けているのも素晴らしい。
・壁面の紹介にも季節感を感じ細やかな配慮を感じました。
・それぞれの遊びで子どもたちが興味をもつであろうことや調べたいことなどが掲示されていて良い。
・園庭の遊びが充実していた。自然物を上手に遊びに取り入れていた。
・園庭の遊具が豊富。
・各部屋に制作の材料がセットされている。
・年長、年中の片付けが良かった。
・保育の盆栽マツ(松)とキク(聞く)これにミル(見る)という見合いができている。
・個とグループでの遊びたい場がそれぞれ確保されていました。
・子どもが思うようにできないとき一人一人に寄り添う姿がよかった。
・床にまでビニールテープで円を付けたりレールを付けるなどして子どもの視点近くに遊び心があって工夫が感じられました。

2.満3歳

・活発に身体を動かして積極的に遊んでいる姿が微笑ましく思いました。
・落ち着いて話しを聞くことができている姿に感動しました。
・待つことができている子ども達の姿に驚きました。
・異年齢との交流にも積極的に参加していたと思います。
・園庭で異年齢の中で積極的に遊ぶ様子と先生が寄り添っている姿が良かったと思います。

・泥ダンゴ作りに取り組む姿が多く見られ、集中している姿を認めている先生の姿が良かったと思います。

3. 年少



・お店屋さんごっこの手つきがとてもよかった。実際にお祭り等で見た経験があり、それをイメージしてなりきる姿が3歳児らしかった。
・自分で「ここまで全部切る」と目標を決めて切っている子がいた。3歳児ながら、その集中力にこれまでの経験の積み重ねを感じた。
・自分たちが思いのままに道具や品物を使って自分たちのペースで遊びを進めることが出来る環境が生まれ、感じる楽しさも格別なものがあったことが伺えた。
・手具や衣装などがたくさん準備されており、踊りたい気持ちが引き出され、なりきって踊りを楽しんでいた。
・3歳児が真ん丸の硬い泥団子を上手に作ることが出来、日頃の遊びの積み重ねを感じた。
・振り返りの時間に、遊びを発表する時間を設けていたことは、子ども達が他の遊びの情報を得て、翌日以降へのやってみたい意欲につながるものと思った。
・園庭や玄関前のホールなどの共有スペースで、一つの遊びと別の一つの遊びがつながり、楽しい遊びを生み出して幼児の満足感を引き出していた。
・何度かトラブルがあったが、その都度教師がトラブルの経緯や相手の思いを聞き出してどうすればよかったかなどに気付けるよう、子ども達と一緒に考え丁寧に関わっていた。そのためトラブル後もすぐに打ち解けて笑顔で過ごすことができていた。
・年長児が、ダンス、砂場、泥団子作りなどあちこちに出かけてさりげなく3歳児に遊び方を教える様子があり、保育者顔負けのさりげない援助の仕方に驚かされた。
・先生方が連携を大切にしていること、協力体制がしっかりできていることが伝わってきた。そのチームワークの良さが子ども達にも伝わっていると思う。

4.年中

・保育者の援助について、子どもが楽しいと感じることはその子どもによって異なるので、子どもの気持ちを受け止めていくこと、その時々の姿の変化に気づいて個々に応じた対応をしていくことなど、子どもの思いを大切にしながら、色々な視点を持ち、広い視野でゆとりのある心で受け止め援助することが大切であること、結果を急がずに成長の過程を大切にしていく必要があることを改めて感じることが出来た。
・遊びの環境や部屋の環境がとても良かったという意見が多い⇒子ども達にとって周囲の環境が及ぼす影響が大きい
・他のクラスの友達と関わりやすい環境
・他のクラスの友達と自然に混ざって遊んだり、いろいろなクラスを行き来して遊ぶ姿が見られる。
・子どもを取り巻く環境が良かった
・紙や廃材、道具類が使いやすい場所に置いてある。
・ピアノの向きがよくて、子どもの様子が良く見える
・先生は自分の考えを積極的に出して言葉で伝えて関われるように援助した

5.年長

・泳ぎの動きを取り入れた独自のスプラッシュダンスは、楽しみながら取り組む幼児の姿がよく見られていた。
・子どもの様子を担任が気付いて、他児に紹介してみんなで技のなまえを決めたりして、幼児が主体的に取り組んでいる姿を認めるような取り組みが、教授型の指導の中に取り入れられていて教師の工夫が感じられた。
・自由に遊ぶ時間に飛び込みが得意そうな男児が何度も友だちのいない隙間を見つけて飛び込んで楽しんでいた。
・背泳ぎで先生に支えられながら泳いでいた男児、不安そうであったが終わった後は嬉しそうだった。
・プールで禁止するかかわりがなかったことに驚き!!
　普通ならば皆と違うことをする子を留めてしまいそうなのに。

・一人一人が意欲的に積極的に活動し、集中している。
・合間合間に子どもたちが「自分でうまくなりたい」気持ちを感じ取れた。
・頑張った、嬉しかったことなど発表し、教師が一人一人の頑張りを認めてくれた、見ていてくれたという思いが自身つながると思いました。
・先生の笑顔で子どもは安心して頑張れるのだと思いました。
・先生が生き生きとして素敵です。
・楽しいからこその笑顔。面白いがいっぱい。
・文字や数量について指導している。わからない子にも子ども同士教え合っている。苦手でもすぐに人に頼らず自分の力で最後まで書いている。
・一歩踏み出せない子にトライするよう促していたり、自然に友だちを笑顔で応援したり、みんなで支えて一緒に「壁」をのりこえている。
・子どもたちが自分の課題に向かって言われなくとも一人一人取り組んでい

る。
・子どもたちの収集力がすごい。一人残らず先生の話に目を傾け顔が(眼)が向いている。
・苦手そうな園児も楽しく取り組めるような工夫がたくさんでした。
・“(音楽や踊りを含めて)自由で楽しい雰囲気”“環境”“子どもの自律”というものが出てきて、更に「今日見られた子ども達の姿」の内容から、自律の因子が“(子ども達同士が)みんなで支える”と姿(因子)にも繋がってきました。
・絵画表現が優れているといった点について、絵画指導についての質問では、実際に体を触らせて実際の体の位置などを実感してもらい、それを絵に生かしている。

6.助言者　岡　健先生 (大妻女子大学家政学部 児童学科 児童教育専攻教授)

今回の竹田幼稚園における取り組みでは、組織マネージメントの視点から精緻に学校評価に取り組まれたのみならず、ドキュメント、週案等々の「しかけ」を通して、日々の保育の営みの中で、まさに子どもの“今”を捉える保育者の“目”の質の向上に取り組まれたものと思います。Missionなきところに組織として進むべき道は見えません。一方でその取り組みは、常に具体として実現されない限り、その向上は望めません。今回は、まさにその両方の取り組みが実現されたといっていいのだと思います。
また今回の分科会では、東北地区において機構が養成している保育コーディネーターの先生方の協力を得て協議会を実施できました。これまで真摯に取り組まれてきた竹田幼稚園の先生方の取り組みについて、機構が指摘しているように、まさに参観者の皆さんと共に肯定的に学びあう貴重な機会が得られたものと思っています。